

令和3年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査における

北九州市立 柄杓田 小学校の結果分析と今後の取組について

スポーツ庁による「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」について、令和3年6～7月に、5年生を対象として、「体力・運動能力」と「運動習慣等」についての調査を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

本結果は、学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。また、運動習慣については、学校のみでなく、家庭で運動を一緒に「する・みる・話す」ことが大切です。本校では、運動習慣の確立と授業の充実により、総合的に体力の向上を目指しています。ご家庭でも運動習慣の確立に向けた取組の充実をお願いします。

※本調査により測定できるのは、体力・運動能力の特定の一部分です。

1. 調査の目的

- (1) 子どもの体力等の状況に鑑み、国が全国的な子どもの体力の状況把握・分析することにより、子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各公立学校が全国的な状況との関係において自らの子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子どもの体力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各公立学校が各児童の体力や運動習慣、生活習慣等を把握し、学校における体育・健康に関する指導などの改善に役立てる。

2. 調査内容

(1) 実技に関する調査

未実施(新型コロナウイルス感染症予防のため)

(2) 質問紙調査

運動習慣生活習慣等に関する質問紙調査

3. 体力・運動能力に関する調査結果の概要

全国の実技調査の結果

<男子>

本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	16.22	18.90	33.48	40.35	46.83	9.45	151.41	20.58	52.52

<女子>

本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	16.09	18.08	37.90	38.72	38.15	9.64	145.18	13.30	54.64

4. 運動習慣や生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
本校の児童は、運動やスポーツをすることが「好き」「やや好き」と回答した児童の割合は約8割であった。運動やスポーツに対する関心が高く、日頃から運動やスポーツに親しんでいる児童が多い一方で、運動やスポーツに対して関心が低い、または苦手意識をもっている児童がいることが分かる。また、本校児童の課題として、休み時間や体育が授業での活動の際に怪我をする児童が見られる。運動やスポーツに対する関心を高める指導の工夫をするとともに、特に体育の授業の中では、準備運動をしっかりと行い、より健康や安全に留意した授業を行っていく必要があることが分かった。 「新型コロナウイルス感染症の影響前(令和2年3月以前)と現在とを比較して、運動やスポーツへの取組はどのように変化しましたか。」という質問に対して、約3割の児童が「運動やスポーツをする時間が減った」と回答した。運動やスポーツに対する関心の低下や運動量の減少にわずかではあるが影響していると考えられる。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科(授業)に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none">○ 体育の授業では、北九州市体力向上プログラムを活用して、主運動につながる準備運動をしっかりと行い、安全に学習を進めることができるようにする。(全学年)○ 運動やスポーツに対する意欲の向上や、個々の体力の向上を目指し、課題練習の際は一人一人の目標に合った練習の場を設けるようにする。○ 保健の授業では、「テレビやゲームの視聴時間や使用時間が長い」という課題を踏まえ、自己の健康の保持増進に関する内容を扱う際は、一人一人の児童が自分の生活をしっかりと振り返り、健康的な生活について具体的に考えることができるようにする。(高学年)

② 運動習慣等に関する取組(1校1取組)

<ul style="list-style-type: none">○ 週に1回、朝学習(学校裁量の時間)の中で、全校一斉で運動をする「体力アップタイム」の時間を設け、運動習慣の定着を図る。○ 校外で行われるスポーツイベント等の参加や観戦等を積極的に行う。運動やスポーツをすることが「好き」な児童を育てるために、運動やスポーツを「する」だけでなく、「みる」「支える」などの多様な関わりをもつ機会を積極的に増やすようにする。
--